

平成三十年度 香川大学 国語

(1)

問一	① 源泉	② 賭け	③ 幽霊	④ 邪魔	⑤ 潜
問二	<p>現実の世界の体験では「他者による承認」が不可欠であるが、ロマンの世界では「相互承認の闘い」はあらかじめ抜き取られ、自我の不全感は打ち消される。『青い鳥』を読むさいも「幸せの青い鳥」を見つけ出すという未定の中心に向かっていく過程で、「自我」を脅かされる不安なしに、「未知」だったものがつきつきに「既知」に変えられていく体験をするから。</p>				
問三	<p>「きれいーきたない」という秩序は、人間の生活経験の積み重ねの中でその心的世界の変容として形成された秩序であり、なぜ「きれい」「きたない」のかを「知る」「判断する」のではなく、ただ「感じ」「味わう」というように、その形成の由来は意識にはまったく与えられないため、その心的秩序が成立すると、視覚と聴覚は、直接的なエロスを伴わない「認識のための感官」としてではなく、人間が世界からエロスを受け取る心的世界の入り口としての器官になるから。</p>				
問四	<p>人間はふつう、「世界」を概念的な理解でしか捉えることのできないものと考えているが、「エロス」は、人間が「きれいーきたない」という感受性を持ち、ひとつの構造を持った「世界」を判断し理解するだけでなく、「感じ」「味わう」ことを可能にするという意味を持つ。</p>				

(2)

問一	㉠ くわだ	㉡ て	㉢ しい	㉣ わび	㉤ しき	㉥ いなか	㉦ へだ	㉧ て
問二	<p>主人のために働いている年老いた自分への給料に比べて、救いを求めに来た見ず知らずの若者に都合してやる金額は多く、主人のひとのよさにあきれ、腹立たしく思っている。</p>							
問三	<p>先輩や友人らの著作も含まれた叢書が、宣伝効果と廉価のおかげで大量生産され、印税としてまとまった金が入ることを、正当な労働報酬と捉えてよいだろうかと気がとがめたから。</p>							
問四	<p>「私」は男手一つで四人の子を育ててきたが、著作で家族を養うのは困難で、暮らしは楽ではなかった。今、長い労苦と努力の報いとしてまとまった金を手に入れることとなり、余生のための貯蓄の誘惑もあったが、大きくなった子供らと一緒に働くよるこびを味わい、次世代の者のために使いたいと思うようになったから。</p>							

(3)

問一	今や落人となった薩摩守忠度が都に引き返すのに、自分を含めてわずか七騎という人数であったことに、忠度の置かれている苦境と目立たぬようにといい配慮が読み取れる。
問二	自身が秀歌と思う百余首を書き集めた巻物を俊成卿に託した忠度は、俊成卿の「決して疎略には思いませんまい。勅撰集入集を疑いなさるな」との言葉に、今はこの世に思い残すことはない、と、最期の戦いに赴こうとする覚悟を表現している。
問三	古今和歌集 新古今和歌集 (後撰和歌集 拾遺和歌集 後拾遺和歌集 金葉和歌集 詞花和歌集 等)
問四	「千載集」の撰者である俊成卿にとって、わずかな兵を従えて歌を託しに訪れた忠度との別れは涙を抑えられないものであり、世が治まった後に忠度の歌を入集する際にも、別れの折の様子や言葉の思い出してしみじみと感慨深かったことと、勅勘の身の忠度であるために名を公にすることもできないが、「故郷の花」の一首に、忠度との変わることのない心のつながりを想起し、並び入れたと考えられる。

(4)

問一	錢曾は、高麗本『論語集解』十巻を、高い値段で蕭公の八世後の子孫から購入した。
問二	エ
問三	よなほ いまだ これを しんぜず。
問四	理由 内容 日本の歴史や文化風俗に詳しい翁海村に、行間に記されている注の字や、「正平」という年号について聞いて『論語集解』十巻の来歴を明らかにするため。 高麗本として伝わっている『論語集解』十巻が、実は日本で作られた写本であるというのが真実かどうかという点。
問五	黄不烈が考える来歴 講義の内容 南朝方の「正平」という年号が、高麗本として伝わる『論語集解』に書かれていたことから、日本で作られた写本が朝鮮へと渡り、高麗の写本と誤認されたまま伝わったと考えている。 錢曾は、遼海道で蕭公が李氏朝鮮への軍隊を監督していた時に手に入れた『論語集解』十巻を、朝鮮で作られた写本だと考えていたこと。